



# 堂の前遺跡

第1次調査報告書

昭和50年3月

# 序

庄内平野の中でも八幡町・酒田市一帯は、史跡「城輪櫓跡」などとくに平安時代頃の遺跡が密集している地域であります。

近年この地域にも、圃場整備事業など大規模な開発がすすめられ、地下に埋蔵されている文化財に重大な影響をもたらすようになりました。以前にも増して埋蔵文化財の適切な保存が要求されるところであります。

この調査は、その一つ八幡町堂の前遺跡の性格と範囲の確認を目的として、昭和49年度に国庫補助事業として実施したものであります。本書はその調査結果をまとめたものであります。今後の諸開発計画に際し、遺跡保存の資料として活用したいと思っております。

また内容的にも、古代の建築部材の発見など重要な遺構・遺物が検出されており、関係方面の研究の一助となれば幸いに存じます。

調査にあたって多くのご理解とご協力を賜わりました調査委員の先生方ならびに八幡町教育委員会をはじめ地元の方々に、心から厚くお礼申し上げます。

昭和50年8月

山形県教育委員会

教育長 赤星 武次郎



1 SB001 基壇出土陶磁器



2 第II層出土陶磁器

## 目 次

I 遺跡の環境	1
II 調査の経緯	3
1 調査に至るまでの経過	3
2 予備調査	4
3 第1次調査	7
III 遺構と遺物	11
1 遺構	11
2 遺物	18
IV まとめ	29

## 挿 図

Fig 1 遺跡環境図	1
Fig 2 予備調査第2トレンチ土層柱状図	5
Fig 3 遺跡地区割り図	6
Fig 4 168ライン土層模式図	8
Fig 5 第1次調査遺構位置関係図	10
Fig 6 SA001杭列実測図	11
Fig 7 SB002掘立柱遺構実測図	13
Fig 8 SB004掘立柱遺構実測図	14

Fig 9	SD001溝状遺構実測図	15
Fig 10	SX002石組遺構実測図	16
Fig 11	ⅥA 66～68区実測図	17
Fig 12	出土木製品実測図	19
Fig 13	出土大斗実測図	20
Fig 14	出土肘木実測図	21
Fig 15	出土土師器実測図( 1 )	22
Fig 16	出土土師器実測図( 2 )	23
Fig 17	出土須恵器実測図( 1 )	24
Fig 18	出土須恵器実測図( 2 )	25
Fig 19	出土酸化炎焼成須恵器実測図	26
Fig 20	その他の遺物実測図	27
Fig 21	予備調査トレンチ実測図	折込
Fig 22	SB001基壇・SB003建物跡実測図	折込

PL 5	1 SB001基壇
	2 SB001基壇発掘風景
PL 6	1 SB002掘立柱遺構
	2 SB003建物跡
PL 7	1 SB004掘立柱遺構
	2 SB004掘立遺構柱根部
PL 8	1 SD001溝状遺構
	2 SD001溝状遺構覆土上面の遺物
	3 SD001溝状遺構内遺物出土状況
PL 9	1 SX002石組遺構
	2 ⅥA 66～68区
PL 10	1 遺物出土状況( 1 )
	2 遺物出土状況( 2 )
	3 遺物出土状況( 3 )
	4 遺物出土状況( 4 )
PL 11	木製品
PL 12	土 器
PL 13	上 その他の遺物
	下 大斗、肘木

## 図 版

口絵1	予備調査第2トレンチ
口絵2	1 SB001基壇出土陶磁器 2 II層出土陶磁器
PL 1	1 遺跡景観 2 第1次調査発掘区(部分)
PL 2	1 予備調査第2トレンチ(部分) 2 予備調査第2トレンチ肘木出土状況
PL 3	1 予備調査第3トレンチ 2 予備調査第4トレンチ
PL 4	1 SA001杭列 2 SA001杭列掘下げ状況

## 例　　言

- 1 本報告は、山形県教育委員会が昭和49年度に国庫補助を得て実施した、山形県飽海郡八幡町法蓮寺に所在する歴史時代遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は昭和49年10月1日から同年12月8日まで行なった。
- 3 本報告では、昭和48年10月に行なわれた予備調査の報告をも併せて行なった。
- 4 遺物の実測整図は、木製品を佐藤庄一が、土製品は舟山良一が担当した。
- 5 写真撮影は尾形與典が担当した。
- 6 執筆者は夫々文末に記した。
- 7 実測図は夫々にスケールを示した。遺物写真はPL 11の下段の他は $\frac{1}{8}$ に統一した。
- 8 編集は尾形與典が担当した。
- 9 調査を行なうにあたって文化庁、奈良国立文化財研究所、また後述の調査委員諸氏のほか下記の方々には多大なる御指導、御助言を賜わった。記して深謝の意を表したい。

山口重三（八幡町文化財専門委員）

小野 忍（酒田市教育委員会）

佐々木洋治（山形県立博物館）

（順不同、敬称略）

# I 遺跡の環境

- 1 堂の前遺跡
- 2 茅ヶ谷地遺跡
- 3 政所遺跡
- 4 顛瀬山古窯跡群
- 5 犀谷地古窯跡群
- 6 城輪柵跡
- 7 明成寺遺跡
- 8 神矢田遺跡

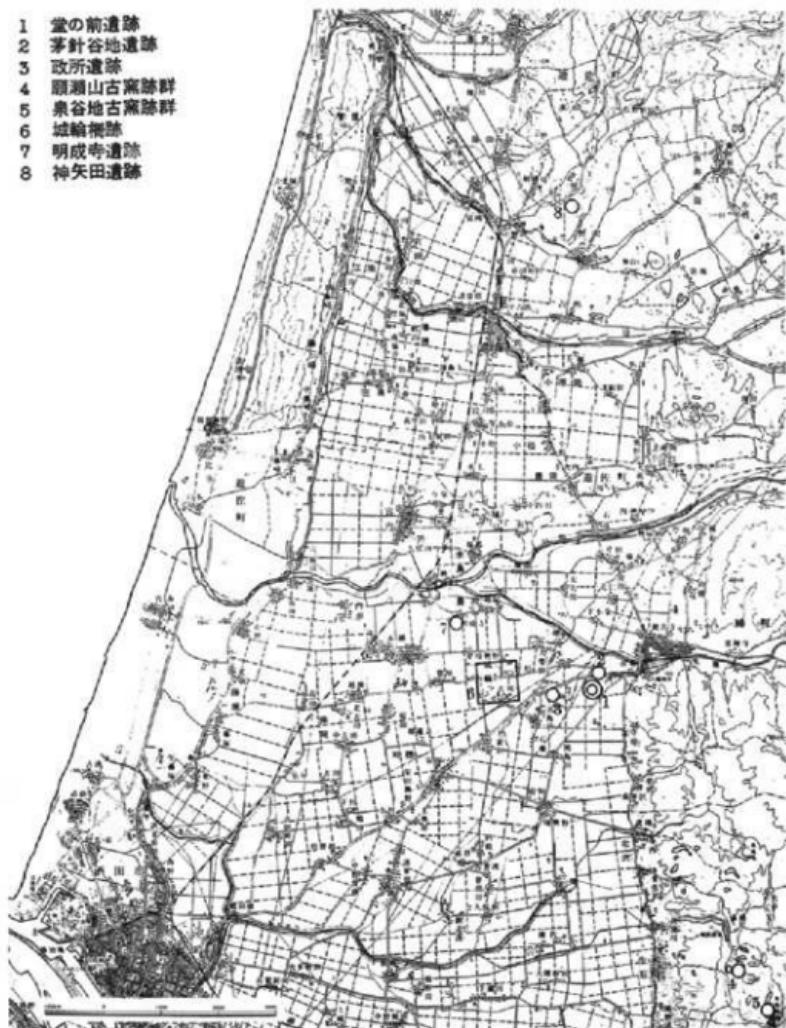


Fig 1 遺跡環境図

堂の前遺跡は山形県鶴岡市八幡町大字法連寺字堂の前に存する。

国鉄羽越線酒田駅より北東へ約8kmの水田中に位置し、北側・東側は出羽丘陵に囲まれその背後に出土羽出土とたえられる雲峰鳥海を仰ぎ見ることができる。西は直線距離にして約5kmで日本海に達し、南へ約9kmほど下がると日本三大急流の一つ最上川に出る。飛倉地帯である庄内平野の北半部にあたる。

遺跡は出羽丘陵に源を発する日向川および荒瀬川の合流点近く、荒瀬川の旧濫亂原上にある。周辺の地質は第四紀の沖積層で、砂質土層を主とする。標高は約15mで西へ行くにつれて低くなるが、遺跡付近における高低差は約1mで、ほぼ平坦である。現在遺跡は水田として利用されており、用水路等に広く土器類、須恵器の散布が認められる。

付近の沖積地には、真西へ約1kmの出羽国府跡と推定されている史跡・城輪柵跡をはじめとして、歴史時代の遺跡が多い。北西へ約2.5kmの所には掘立柱建物跡を出した明成寺遺跡、北東へ県道を越えてすぐの地点には須恵器の散布地である茅ヶ谷地遺跡、西へ600mの地点には同じく須恵器の散布地である政所遺跡などがある。

さらに、遺跡の性格に関連して注目しなければならない遺跡として、東部の出羽丘陵に存する古窯跡群があげられよう。それらは庄内東部丘陵地域古窯跡群と称されているが（註1）、現在でも山腹におびただしい須恵器破片の散布が見られる地点がある。中でも堂の前遺跡より東南6km付近の顧瀬山、泉谷地の二ヶ所の古窯跡群は一部発掘調査もなされ注目すべき成果があげられつつある（註2）。

また、鳥巣山頂には、『続日本後紀』承和5年5月11日条に初見し、『三代実録』貞觀18年条に「從三位勧五等大物忌神社・鮑海郡山上ニアリ」と見える大物忌神社がある。そのノロ宮が本遺跡の北東約4kmの丘陵上、上巣岡に位置していることも付記しておく。

（舟山良一）

註1 柏倉亮吉・伊藤忍「平野山古窯跡群」（寒河江市教育委員会、1970年）

註2 川崎利夫「酒田市顧瀬山第1号古窯跡の調査概要」（庄内考古学1、1966年）

## II 調査の経緯

### 1 調査に至るまでの経過

堂の前遺跡付近から木材や土器などの遺物が発見されることとは、古くから地元の人々に知られていたが、遺跡の価値が初めて認識されたのは昭和30年のことになる。この年遺跡一帯に暗渠設置工事が行なわれ、工事中に多量の木材が発見された。同年八幡町在住の小野治氏らは、遺跡の重要性に鑑み地元高校生の手を借りて試掘調査を実施された。この調査では、井桁状に組まれた柱・長押（ナゲシ）・斗（マス）などの多量の建築部材および櫛木、それに土器類・須恵器・田下駄・銅鏡などが発見されたという。現在、斗と土器・田下駄を除いてその所在が不明なものが多いのは残念である。なお昭和37年度刊行の「山形県遺跡地名表」（註1）にも重要遺跡として登録されている。

その後は若干の遺物採集がなされただけで近年に至っているが、昭和48年になって、遺跡付近に東北電力の送電塔の架け換え計画・八幡町一条バイパスの建設計画が予定されたため、遺跡の範囲と性格の一部確認を目的として、昭和48年10月に八幡町教育委員会によって試掘を伴なう分布調査（年度調査に対して、以下子備調査と呼ぶ）が実施された。この子備調査について既に報告がある（註2）が、遺跡の明確な範囲こそ捉えられなかつたものの、遺跡の推定範囲のほぼ中央部で建築部材が集中して発見され、しかもその時期が平安時代後半～鎌倉時代初頭頃と推定されるに至った。また水田用水路等における遺物の散布およびボーリング調査の結果から、遺跡の範囲が予想以上に広がっていることがわかった。付近に国指定史跡「城輪柵跡」や掘立柱建物跡の出土した明成寺遺跡が存することも考え合わせ、堂の前遺跡は改めてその重要性が確認されたわけである。

ところで上記の送電塔と一条バイパスの開発計画は、行政指導によって遺跡の推定範囲から外されることになったが、また新たに大規模な開発事業が昭和49年度より予定されることになった。庄内農業基盤総合整備・パイロット事業と大規模県営最上川右岸開拓整備事業がそれである。両計画とも庄内地方北半島を含む広範な計画なため、堂の前遺跡の適切な保護対策を早急に立てる必要が出てき、今回の第一次発掘調査の実施に至った。

（佐藤庄一）

註1 「山形県遺跡地名表」（山形県教育委員会・1963年）

註2 「堂の前遺跡分布調査報告書」（八幡町教育委員会・1974年）

## 2 予備調査

調査日 昭和48年10月15～17、同11月1日

調査主体 八幡町教育委員会、(協力)山形県教育委員会

調査員 柏倉亮吉(山形大学名譽教授)、山口重三(八幡町文化財専門委員)

相藤規雄(八幡中学校教諭)、藤原岳良(八幡町教育委員会)

佐藤庄一(山形県教育庁文化課)

調査は3回に分けて行なった。第1回調査(昭和48年10月15～17日)はボーリング調査と試掘による遺跡の範囲確認、第2回調査(同10月24日)は遺跡の地形・地質の調査、第3回調査(同11月1日)はボーリング調査による遺跡の範囲確認を主とした。

ボーリング調査は、聞き込みおよび昭和80年度の調査によって存在したという角材列の検出につとめ、柵列等による遺跡の外界線把握を行なおうとした。調査は十字形にボーリング地点を設定しほば1mおきにボーリングを行ない、さらに補足のボーリングを数ヶ所実施したが、角材列は確認できなかった。しかし遺跡の推定面積にくらべてボーリング地点が狭いことと、ボーリング棒の長さが1mしかなくその下が確認できないことを考えるとき、なお角材列が存在する可能性をもつ。

ボーリング調査の段階で木材が集中して埋没しているところが確認され、その性格を調べるために3地点を小試掘した。これを試掘順に1、2、3、4トレンチとする。試掘の結果2、3、4トレンチにおいて建築部材がほぼ全面的に検出された(Fig. 21)。

このうち2トレンチにおける層序は、Ia層—明褐色耕土、Ib層—青灰色微砂、IIa層—黄褐色粘土(盛土層)、IIIa層—河床灰白色粘土、IIIb層—建築部材層とIIb層の間から発見された(Fig. 2)。他のトレンチの層序もほぼ同じである(註2)。

1トレンチは、40×40cmの方形で、幅10cm、長さ80cm、厚さ1cmの木材が1片出土しただけである。なお本トレンチだけは黄褐色粘土層が認められなかった。

2トレンチは、800×600cmの南北に長い試掘溝ではほぼ全面に建築部材が検出された。建築部材は上面で最大10cmの高低差があるもののほぼ平らに並び、各部材の隙間に斗(マス)などをつめ込んだような状態で検出された。本トレンチで出土した建築部材は、斗(マス)・肘木(ヒキ)・長押(ナゲシ)など計20点があるがいづれも角状の面取りを施したものである。幅は15・18・30・38・45cmと一定せず、斗・肘木以外の建築部材の長さも21～40.2cmまで多様である。調査は建築部材の上面の検出のみにとどめたため、詳細は今後の調査にまたざるを得ないが、測定できた建築部材の厚さは、18・24・30cmの三種類があった。5号建築部材と6号建築部材に欠けた縦ぎ縦の組み合いであるのが、建築部材どうしの重なり合いは認められない。また6号建築部材には、二ヶ所に鉄筋が打ってあった。

建築部材は青灰色粘土中に埋没していたため、保存は極めて良好である。

なお本トレンチの建築部材は、調査後すぐ埋戻しを行なつたが1号建築部材(斗)と7号建築部材(肘木)の2点は、今後の調査を考慮して取りあげた(Fig. 18・14、PL18-下)。このうち7号建築部材の側面から墨書きが認められたが、赤外線撮影等によつても文字が判読できなかつた(PL18-下)。

3トレンチは、100×140cmの南北にやや長い試掘溝で、幅15～21cmの東西に長い建築部材が4本検出された。建築部材の長さはトレンチ内だけで約65cm、厚さは表面の検出に留めたため不明である。

4トレンチは、55×45cmのほぼ方形の試掘溝で、南北に長い建築部材が3本検出された。

各トレンチの調査結果およびその付近のボーリング調査から、上記建築部材が埋没していると考えられる範囲は、東西1.05m・南北0.8ないし1.05mで、3トレンチ北側および2トレンチ南側がそれぞれ南北の限界を示すようである。形はおおそ方形で、方向はほぼ真北に一致する。この部材は自然的なものではなく、廃材を意図的に敷いたものと考えられ、建築物の沈下を防ぐための地盤と推定される。部材の上面の、盛土と思われる黄褐色粘土層の存在も、この推定を助けるものであろう。

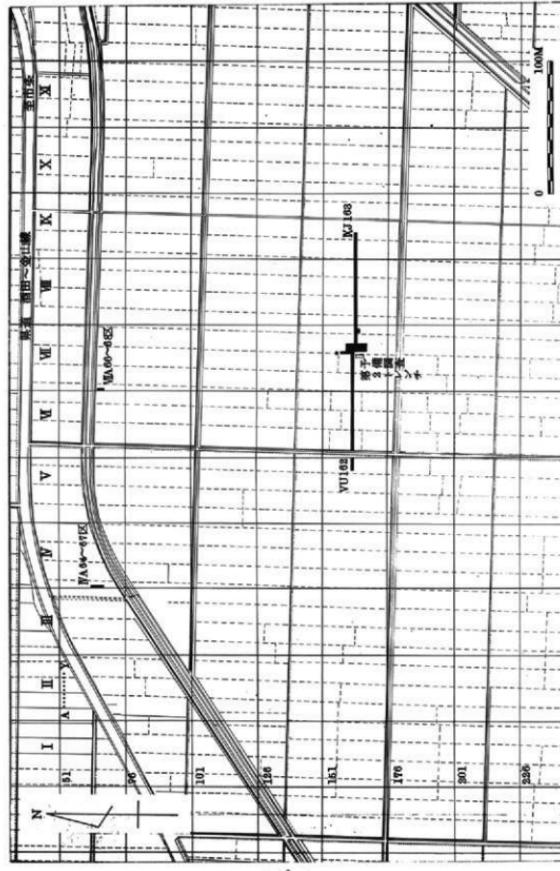
予備調査で出土した土器は15片程で、須恵器と所謂「須恵器系」と呼ばれるもので、器形は杯・甕などである。杯はロクロ形成、無調査、平底で、器高に比ペ口径がやや大きい。甕は内外に叩き目をもつ。時期的には平安時代後半から鎌倉時代初期頃のものと推定されるが、上記遺物以外に3トレンチ上層で割り調整のある丸底甕の須恵器が1点出土しており、一部はさらに古く遡る可能性をも有する。

(佐藤庄一)

註1 本稿は、「堂の前遺跡分布調査報告書」(八幡町教育委員会、1974年)を要約し、一部修正を施したものである。

註2 層位の名称は、第一次発掘調査の記述に書き改めた。





3 第1次調查

### (1) 概要

本調査は、山形県教育委員会が国庫補助を得て、八幡町教育委員会の協力のもとに行なったものである。調査費用は総額400万円で県と国が半額づつ負担した。

第一次調査の目的は、前節で少し述べたように諸開発事業に対して、堂の前遺跡の性格と範囲を把握し、遺跡の適切な保護対策を図ることにある。具体的には、遺跡の外郭の確認を主目的とし、予備調査の際に発見された建築部材密集地に関しては、その上部構造の在否確認に留めた。

調査は昭和49年10月1日から12月8日までのほぼ10週間にわたり実施したが、晩秋時の収穫調査となつたため、雨や雪、さらには凍水等に悩まされた。

調査には、教育庁文化課の尾形與典を主任とし、佐藤庄一、野尻 侃、舟山鹿一の計4名が従事したが、このほか調査委員として、柏倉亮吉（山形大学名誉教授）、佐藤 巧（東北大学教授）、岡田茂弘（宮城県土質試験研究室所長）、川崎利夫（天童市立第4小学校教諭）、佐藤誠彦（酒田市立酒田中央高等学校教諭）の諸氏には、幾度となく現地に御足労いただき演説の御指導を賜わった。この件を借りて感謝の意を表したい。

また地元の八幡町教育委員会はじめ作業員の方々には、多大な御協力をいただいた。合せて感謝いたしたい。

## (2) 遺跡の地区割り

本遺跡の範囲はほとんど不明なので、地区割りを行なうにあたっては、暫定的なものとして次の方法を採った。

昭和48年度の予備調査時の第3トレンチのそばに15cm角の木杭を埋め、そのほぼ中央に釘をうちこんで、それを座標・レベルの原点とした。そこから真北 ( $N - \vartheta^{\circ} - W$ ) にのびる線を南北基準線とし、さらに、原点をとおってこれと直交する線を東西基準線とした (Fig. 8)。

地区割りの範囲は、これも暫定的なものであるが、一応の目安として方 6町を推定し、原点をほぼその中央において。つまり原点から北に 326 m いき、さらに西に 380 m いった地点を当該座標の起点としたのである。

さて地区割りの詳細であるが、南北方向は、起点から南へ3mごとに1・2・3・8……121・122……区とし、東西方向は、起点から東へ50mごとにI・II・III……の大区を設け、それぞれをさらに2mごとに区割りして、西から東へA・B・C……Y区とした。これらの呼称は、2m四方のグリッドを単位として行ない、たとえば、座標の起点を北西隅にもつグリッドはIA1区となる。なお、原点の座標はVI P165である。(Fig.22参照)

(尾形與典)

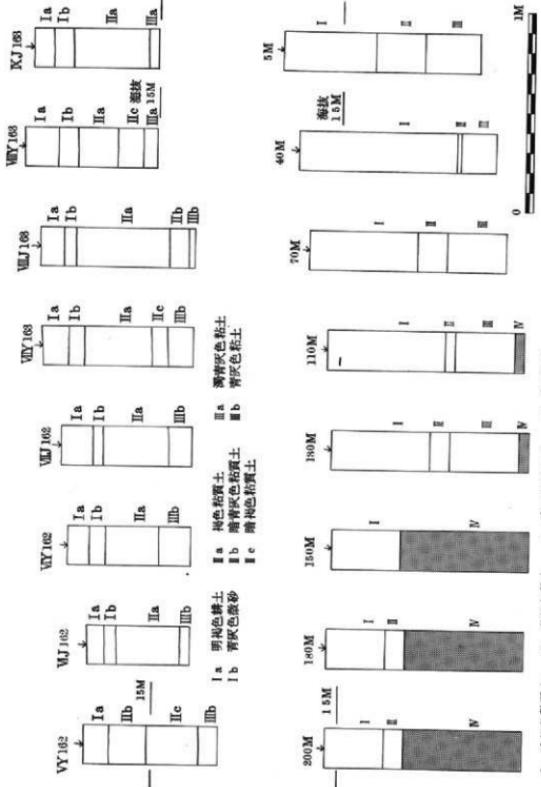


Fig. 4 1-6.3 ライン土壌模式図

### (3) 層序 (Fig 4)

堂ノ前遺跡の層序は基本的に3層に分かれ単純な層であるが、さらに次のような細別が可能である。

第I a層 棕褐色土。耕作土である。

第I b層 青灰色土。微砂層で、水田の基盤をなす。I a・I b層あわせて約30cmの層である。

第II a層 棕褐色土。粘質土層で、乾燥すると非常に固くなる。30~40cmの厚さをもつ。VU~Y 163 区においてはこの層が見えない。

第II b層 暗青灰色土。同じく粘質土層で、VU~Y 163 区において現われる。厚さは約30cmである。

第II c層 暗褐色土。粘質土層で、VII 163 区より東においてII a層に統く層としては普通的見られる。厚さは10~20cmであり、地表面からは60~80cmを測る。土師器・須恵器の細片が多く含む。

第III a層 青灰色土。グライ化された粘土層で炭化物や遺物を含む。VII 163 区から東方において、無遺物層であるIII b層の上に10~30cmの厚さで堆積している。

第III b層 青灰色土。III a層と同じグライ化された粘土層である。無遺物層である。地表面から80cmほどでこの層になる。発見された遺構はIII a・III b層を掘り込んでいる。

次に、層序に関する遺跡の西側の範囲推定の参考にするために実施したポーリング調査について述べる。

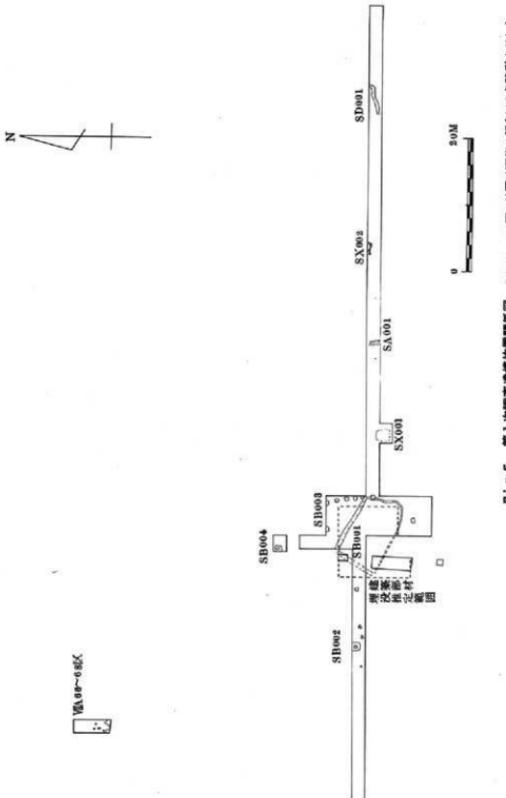
調査は、今掘った東西に長いトレチの西端VU 163 区からトレチ延長上に西に、5mごとに200 m行なった。その方法は1mの長さのポーリング棒を用い、まず地表面から70cmまでつきさして付着した土を観察し、次にその穴に1mまでつきさして観察し、次の地点に移るという方法をとった。その結果の一部を模式化したのがFig 4である。

調査によると、100m付近までは見られない青灰色砂が100m付近で現われ、それが100m~150mの間で地表面から85cmまで上がって来る。そして、そのまま200m付近まで続く。さらに、50cmほど任意にポーリング棒をつきさしてみたが、結果は同じであった。つまり、青灰色砂層が上がって来て、遺物を包含する上記IIc層、IIIa層が見られなくなるわけである。

以上のことから、VU 163 区より西150 m付近以西には遺跡は延びない可能性があるのではないかということを考えられる。なお、48年度に行なった表面採集による遺物採集可能な範囲の西端がおおむねポーリング調査による結果と合致している(Fig 4)。

(舟山良一)

### III 遺構と遺物



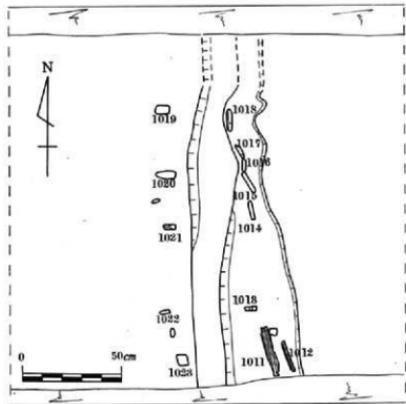
—10—

#### 1 遺構

今年度の調査区は8ヶ所にわかれ、ひとつはVIA 64~67区の4グリッド。ひとつはVIA 68~69区の8グリッド。もうひとつはVU 108区からXJ 108区にいたる112グリッド。合計119グリッドを発掘した(Fig. 8)。

今回の調査では、SB 002掘立柱遺構の西方には、遺物の出土は見るが遺構は認められず、遺構はSB 002掘立柱遺構の東、SB 001溝状遺構までの間に集中していることが観察された。グリッド番号でVG 102~VX 108区の間である(Fig. 5)。

なお、前後したが、遺構の標示に関しては、宮城県多賀城跡調査研究所で採用している方式(註1)に大略従ったが、一部変更を加えた。今回使用した記号についていえば、SA……槽・杭列、SB……建物跡(この中には基壇や掘立柱列などをも含ませることにした)、SD……溝、SX……その他、となる。このほか、散在するピットは個々に一連番号を付け、番号の前にP tというアルファベットを冠した。



—11—

### (1) SA 001 杖列

原点の東約20mの所を、ほぼ南北の方向に掘られた杖列を伴なう溝の跡である。発掘区の幅が2mであったため、その長さしか検出していない。溝は一部未検出の所もあるが二段になっており、西側が一段高くなっている。溝の幅は西側の最大値で58cm、最小値で30cm、北に行くにしたがって少しせばまる。東側の溝の幅は最大値で89cm、最小値で18cmである。深さは遺構検出面から東側溝で10~20cm、西側溝で2~8cmである。遺構は細層一青灰色粘土を掘り込んで作られ、覆土は炭化物を含んだ暗青灰色粘土である。この溝の東西両脇には、矢板および杭が部分的に列をなして検出された。矢板は東側溝の西壁に沿って6本検出され、そのほとんどが板状の木材を用い、先端をそいである(Fig 12参照)。

杭は西側溝の西方約15cmの所に5本検出され、横断面形が長方形を呈し、同じく先端がそいである。矢板および杭は、掘り方が認められず両者とも先端がそいであることから、おそらく打ち込んでいたものと思われる。なお矢板および杭については、遺物の項で後述する。また当遺構に関連する遺物は発見されなかった。

以上述べたSA 001杖列の性格はまだ不明であるが、杭については土留め等の機能を考えられるが、溝と矢板については八幡町一条地区付近に条里遺構の存在を推定する説もあり、今後の調査によってはそれに関連する水田の跡となる可能性を持つ。

### (2) SB 001 基壇 (Fig 22, PL 5)

原点をほぼ中心として、予備調査時に確認された後地業の上の基壇である。

東西方向に長く、やや平行四辺形を呈し、ほぼ南面する。南北軸は約80度東に偏する。南辺のほぼ中央部に河原石で組まれた階段らしきものが遺存するが、検出したのが一部分であるため、はっきりしない。

当該基壇は、東西約11m、南北約8m、高さ約30cmをかぞえるが、ノリ面がゆるやかであり、約24度の勾配をもつ。

基壇は黄褐色土によって構築されており、この黄褐色土は基壇の外側にも拡がっているがその範囲は現在のところ未確認である。基壇上には建物の痕跡は認められなかった。

この基壇の中軸を北方に延長していくと、日向川の右岸・上森岡の大物忌神社宮を経て、延喜式内神・大物忌の神の鎮座する鳥海山頂に至るということは、この基壇の性格を考える上でひとつの示唆ともなる。

また基壇とその下の後地業とは次の諸点から創建期を異にするものと考えられる。まず両者の中軸線が異なる点であり、大きさの異なる点であり、さらには後地業の持つ性格より見た点からもいえるであろう。

予備調査で得られた資料によれば、当該地業は一辺約11mの方形を呈し、しかも部材は

南北方向を向いて敷かれている。一方SB 001基壇は上述のように東西方向に長く、しかも南北軸は80度東に偏している。もし両者が同一時に建設されたものであれば、この様な相違は生じにくいと思われる。ひるがえって後地業について考えるに、一体後地業とは、おもに湿地などで用いられ、建造物が陥没するのを防ぐためのものであり、当該後地業のような木材を用いている場合は、当然のことながらその上部構造物はかなりの重量をもつものといえる。ところが基壇上には建物の痕跡は認められない。建物の無い基壇のみであれば、かような後地業は不要ではなかろうか。

現在のところ、SB 001基壇は、後地業を利用して二次的に造られたものであろうと考えられる。

今後の調査によってこの点を明らかにして行きたい。

### (3) SB 002 振立柱遺構 (Fig 7, PL 6-1)

原点から17m程西、W G 102区で検出された振立柱で、田畦の下から発見されたものである。掘り方は東西18cm、南北は検出できた範囲で104cmあり、胴張りのある方形を呈する。IIIb層から掘り込まれており、埋め土は炭化物を含む青灰色シルトの單一層によって構成されている。掘り方のほぼ中央に直径54cmの柱根が遺存しており、IIIb層上面から20cm程頭を出している。上端はかなりの腐蝕がみられるが、埋め土にとりまかれていた部分は明瞭に手斧の痕が観察できた。

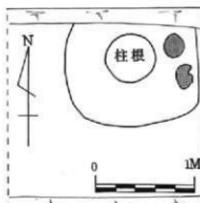


Fig 7 SB 002 振立柱遺構実測図

掘り方上面より60cmほど掘り下げたが、湧水と降雨のため、掘り方の底。柱根の下端は確認できなかった。また、これと対応すべき柱の存在を確かめるべくボーリング調査を行なったが、確認できなかった。建物としての体裁をとり得ないので、当遺構を上述のように振立柱遺構とした。

### (4) SB 003 建物跡 (Fig 22, PL 6-2)

原点のすぐ東に位置する建物跡で、検出範囲内で南北に14m程のひろがりをもち、SB 001基壇をその中に含むようにして位置する。

地表面に礫、炭、鉄滓などを敷き、つき固めたもので簡単な地上建築の基礎であろうと思われる。これの大きさや形はそれぞれ異なるが、大体一辺60cm程の方形を見ることができよう。

検出範囲から、南北棟桁行9間、梁行1間と推定され、南北軸は約6度西に偏する。東

側列で北から4間目の柱間が50 cmほどつまるばかり、各々の柱間は150 cm程(約5尺)のほぼ等間隔である。渠間は400 cmで、これは桁行3間分にほぼ相当する。東側列の検出南端の基礎はSB001基壇の北東隅を削って構築しているようである。とにかく両者の遺存状況より見て、SB003建物跡はSB001基壇より新しいことは明確であるが、しかし、SB001基壇がまだ露呈していた時期に、これにかかるようにして建てられた建物とはどういうものであろうか。

#### (6) SB004 挖立造構 (Fig 8, PL 7-1)

原点から北に約18 m、VN 156区とVI 156区とにまたがって遺存する掘立柱で、SB002 挖立柱造構と同じく、田畦の下から発見されたものである。

掘り方は、東西は検出できた範囲で75 cm、南北は100 cmあり略方形を呈する。Ⅲb層から掘り込まれており、埋め土は炭化物を含む青灰色シルトの單一層によって構成されている。掘り方のはば中央に直径50 cmの柱根が遺存しており、約15 cmほど頭を出している。ここでも湧水に悩まされ、湧水による壁の損傷を防ぐため、掘り方の壁の若干内側を掘り下げた。掘り方上面より

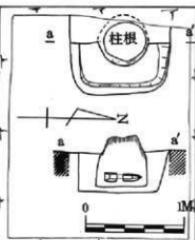


Fig. 8 SB004 挖立造構実測図

80 cm程のところで柱根の下端を確認できた。それによると、柱根の遺存全長は約150 cmで、下端近くに2個(連絡を考えれば1個)の横長の目途穴が穿たれてあった。掘り方は48 cm近くまで掘り下がったが、湧水のため底を確認できないままおわざるを得なかった。

この付近にもボーリングを行なったが、対応すべき掘立柱の存在は確認出来なかった。また、SB003掘立柱造構とは、掘り方の形状、大きさ、柱根の直径などから見て、別の造構である可能性が大である。

#### (6) SD001 潟状造構 (唯V 163～唯X 163区) (Fig 9, PL 8)

原点の東約8.3 mの所にあり、ほぼL字状の浅い溝である。検出した範囲で溝の長さは約4.5 m、幅は溝上部最大値で55 cm、最小値で30 cmを計る。溝は唯V 163から北東に延び、中央で一部膨らんだのち唯X 163 北東隅で北に折れる。造構はⅢa層一溝青灰色粘土を掘り込んで作られ、溝の深さは7～10 cm、断面は逆台形を呈し、覆土は土器・木炭を多量に含んだ溝青灰色粘質土である。溝の両端は発掘時の排水用溝を作る際に破壊してしまったため確認できなかつたが、断面観察からもう少し延びることが予想される。

当該造構内からは土器器・須恵器がまとまって出土した。土器の器形には壺・蓋・甕・壺などがある。土器については遺物の項で後述する。

SD001 潟状造構の性格は、発掘地域が狹くなお不明であるがその時期は出土遺物からみて平安時代を下らないものと推定される。

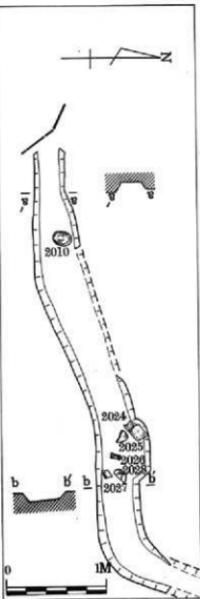


Fig. 9 SD001 潟状造構実測図

(7) SX 001 不明遺構 (VIIW 168 ~ X 168 区)

原点の東約14mの所にあり、隅丸方形の低い壇状の遺構である。検出区城内における当該遺構の大きさは、東西158cm、南北50cmでさらに南に延びるものと思われる。断面は平坦な台形を呈し、高さは約9cmを測る。遺構はⅢ b層一青灰色粘土の上に暗褐色粘土を盛って築かれており、上面に直径約30cmの円形の浅い落ち込みを数個もつがなお明らかでない。暗褐色粘土の中からは長径約10cmの河原石が数個と多量の鉛筆が発見された。

当該遺構の性格については、発掘中途なため不明と言わざるを得ないが、近接発掘区よりフイゴの羽口片が3点発見されていることを加味すると、金属・中でも鉄等を小規模に加工する施設、たとえば鍛冶場遺構の可能性を有する。

なお上記遺物以外の土器等は発見されなかったが、遺構上面より「永楽通宝」が1点発見されており (Fig 20)、当該遺構の時期決定の一資料となりうる。

(8) SX 002 石組遺構 (VII L 168 ~ M 168 区) (Fig 10, PL 9-1)

原点の東約48m、VII L 168 ~ M 168区の北半に存する弧状の石組遺構である。長径約30cm 大の河原石15個を張状に並べており、その両端に幅5~10cm、長さ10~50cmの面取りのある板材6片が出土した。発掘区城内における石組遺構の長径は約180cm、短径は55cmである。当該遺構は、水田面下約100cmにあり、Ⅲ a層一薄青灰色粘土を約80cm掘り込んで作られている。石組遺構内の覆土は、掘方の両端が青灰色砂質粘土層、中央部が暗青灰色砂層で、いずれも掘り込み面に比べ砂質分が強いのが特徴である。木材以外の遺物の出土はなかった。

SX 002 石組遺構の性格は、まだ調査がその一部に過ぎないため不明な点が多い。ただ覆土の土質が砂質であることは、遺構内に水がしばしば入っていた結果によるものと考えられ、中に木材が入っていることと合わせて、井戸もしくはそれに関連する用・排水施設等の可能性も考えられる。

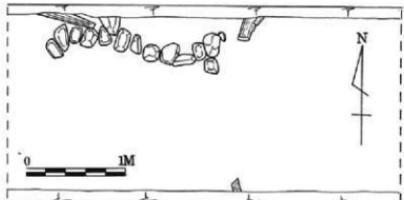


Fig 10 SX 002 石組遺構実測図.

(9) VII A 66 ~ 68区 (Fig 11, PL 9-2)

原点の北約102m、幹線用水路のすぐ南側にある。本発掘区は10数年前出土したという柵列の確認を目的としたものであるが、結果として柵列は検出できなかった。しかし発掘区全域に黄褐色粘土が在り、南側ではピットが6個発見された。各ピットは黄褐色粘土を掘り込んで作られている。なおVII A 66区北側は用水路を作った際に一部擾乱されている。

このうち黄褐色粘土の深さは80cm以上あり、SB 001基壇の盛土と同じ性格をもつものと推定される。ピットのうちPt1 ~ Pt4は直径20~40cmの円ないし橢円形を呈し、深さは8~17cmである。覆土は木炭を多く含む暗褐色微砂層である。Pt5 ~ Pt6はVII A 68区南側で発見された大きな落ち込みであるが、調査区の設定上から部分的な検出に留まった。発掘区においてPt5の大きさは、東西50cm、南北50cmで隅丸長方形を呈す。深さは30cm。覆土は上層が黒色木炭層、下層が木炭を多く含む暗褐色微砂層で、土器は両層より多量に出土した。Pt6の大きさは、東西105cm、南北85cmの不正橢円形を呈し、深さは17cmである。覆土は木炭を多く含む暗褐色微砂層で、土器は少量出土した。土器は須恵器の杯・甕の破片がほとんどである。

上述したPt1 ~ Pt4とPt5 ~ Pt6の性格についてはまだ明らかでない。

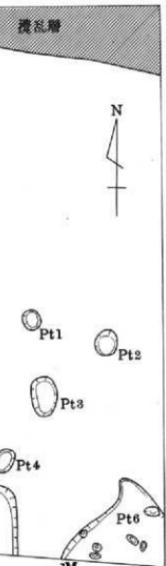


Fig 11 VII A 66~68区実測図

註1 「宮城県多賀城跡調査研究所年報1972 多賀城跡 昭和47年度発掘調査報告」

宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所 昭和48年3月

(尾形與典・佐藤庄一)

## 2 遺物

今年度調査における出土遺物は、ほとんどが木質遺物と土器類によって占められる。他には若干の鉄・用途不明の土製品・鉛錠・果実の種子などが見られる。

木質遺物はそのほとんどを板材ないしは自然木が占め、いわゆる木器は少ない。土器類は杯・高台杯・蓋・壺・鉢などの器形がみられる。

### (1) 木製品 (Fig 12, PL 11)

予備調査において多量の建築部材が出土して注目されたが、今回の調査でも約30点の木製品が出土した。出土木製品は水田畦畔材、飲食用具、建築部材、その他、に大別される。水田畦畔材 SA001 桅列から15点の木製品が出土したが、そのうちに矢板材が6点、杭材が6点ある。矢板材はいずれも下半部がわずかに残存するのみである。現存する大きさは、長さ7~25cm、幅4~10cm、厚さ0.8~1.9cmで、先端を鋭く削りである。板目材を用いて芯に近い面は荒削りで、表皮に近い面は数度の削りを施している。窓口のあるものはない。矢板材の向きは溝側に表皮に近い面を向けたものが多い。杭材は薄の外に打ち込まれていたと思われるもので、これも下半部がわずかに残存するのみである。全体的に腐蝕が著しいが、縦断面が斧状を呈しているものが数点あることが注目される。

飲食用具 1001はサジと思われる。柄を作り出し、表面は平坦であるが裏面に丁寧な削りを施し、丸味を出している。オケの底とみられるもの(1008~1005)が出土しており、これらは直径9.5~15.5cm、厚さ4~8mmの円形を呈する。1004、1005は半ばを欠いている。断面は平坦で周囲に丁寧なふち取りがみられる。このほか、外側に黒漆を、内側に朱漆を塗った鉢の一部と思われるものが出土している。

建築部材 今回の調査では建築部材の出土はなかったが、便宜上予備調査時に取り上げた1号建築部材(大斗)、7号建築部材(肘木)について説明を加えよう。斗(Fig 13)は平斗幅約30.5cm、平斗尻幅21.0cm、木口斗幅28.2cm、木口斗尻幅19.1cm、斗せい23.0cm、敷面せい19.2cm、斗尻せい6.9cmを測る。敷面裏には直径約3.0cm、深さ約0.6cmのホゾ穴が認められる。幅に比してせいが高く、斗縁も勇壮である。針葉樹を用い、調整は良好である。肘木(Fig 14)は上端幅92.0cm、下端幅71.2cm、木口幅15.7cm、肘木せい20.5cm、木口せい10.2cm、下端の斗幅に相当する部分で17.7cmを測る。上端に幅87.0cm高さ最大径18.4cmの面取りをもつ。木口の中間部に角をもち、下半部が彎曲する。下端は平坦である。針葉樹を用い、側面と上端に丁寧な手斧による調整を行なっている。

その他 1002は断面ほぼ長方形の木材の一端に柄状の作り出しを設け、下端に抉りをもつ。両筋が欠けているため用途は不明である。このほか、直方形に幅3cm厚さ1cm程の面取りを施した材が16点ほど出土している。

(佐藤庄一)

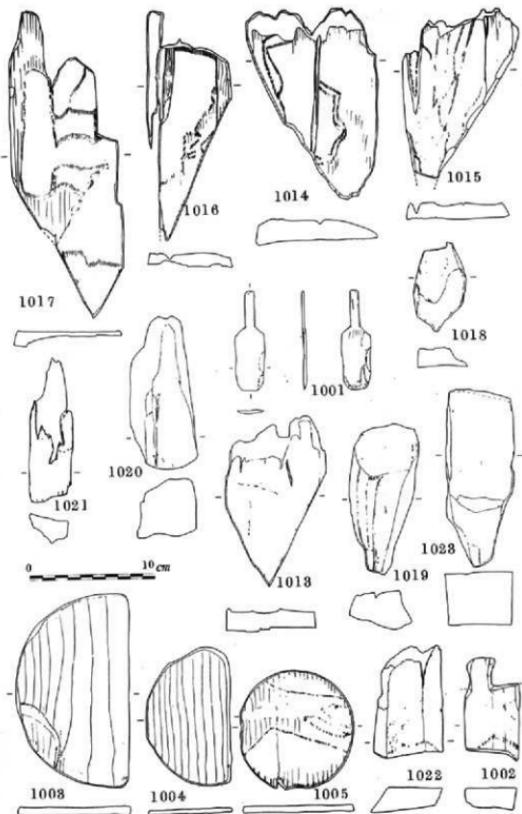


Fig. 12 出土木製品実測図

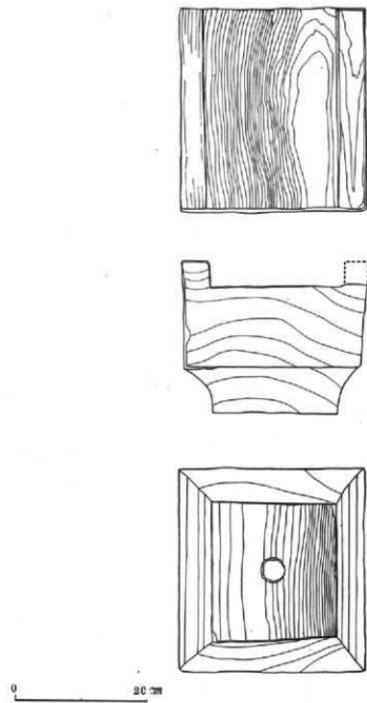


Fig. 15 出土大斗實測圖

—20—

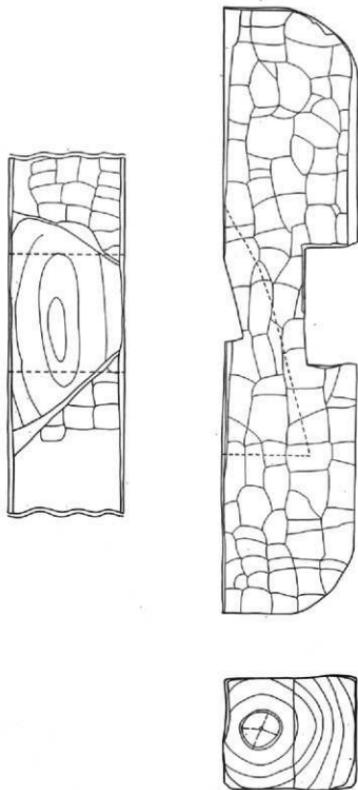


Fig. 14 出土小木器實測圖

—21—

(2) 土 器 (Fig 15, PL 12)

土器は次の様に大別した。すなわち、土師器・須恵器・酸化炎焼成須恵器（註1）・陶器器の4種である。陶器器は整理分類が不充分であるので、これに関しては写真（口絵2）を載せることとし、詳細は後日に俟たい。

土器の概要は表によって示した。表の遺物番号は挿図番号、図版番号と共通である。

土師器(1)

遺物番号	器形	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し 技法	再調整	備考
		口径	底径	器高						
2078	杯	144	52	48	暗褐色	良	良	回転糸切	内底にミガキ	
2020	杯	—	62	—	灰褐色	良	可	回転糸切	内底にミガキ	
2015	杯	—	65	—	暗赤褐色	粗砂混	良	回転糸切	なし	底面に墨書き、内面に火ダメス等のスジあり
2090	甕	99	—	—	暗褐色	可	良			内面に輪模み痕あり、外面に炭化物付着
2098	甕	109	—	—	黒褐色	良	良			

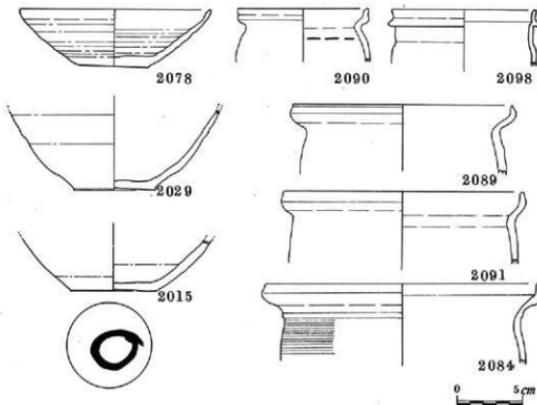


Fig 15 出土土器実測図(1)

土師器(2) (Fig 16, PL 13)

遺物番号	器形	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し 技法	再調整	備考
		口径	底径	器高						
2051	甕	—	60	—	黒褐色	良	可	回転糸切		
2094	甕	—	108	—	淡褐色	良	可			
2098	甕	178	—	—	黄褐色	粗砂混	良			
2086	甕	181	—	—	黒褐色	良	良			
2024	甕	206	—	—	暗褐色	良	良			

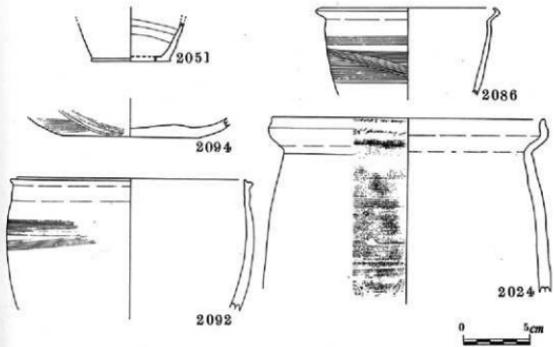


Fig 16 出土土器実測図(2)

須恵器(1) (Fig 17, PL12)

遺物番号	器形	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し 技 法	再調整	備考
		口径	底径	器高						
2006	杯	180	60	34	暗灰色	粗砂混	良	ヘラ切	体部下半及び 底部外周ナデ	
2055	杯	—	53	—	灰白色	良	可	ヘラ切	底部外周ナデ	
2016	高台杯	188	59	47	暗青灰	粗砂混	良	ヘラ切	高台内外ナデ 体部に墨書き	
2014	高台杯	158	68	71	暗灰色	良	良	ヘラ切	高台内外ナデ	
2007	杯	128	59	41	灰白色	良	可	回転糸切	なし	内面に淡遺存、底部に 墨書き
2059	杯	(138)	(59)	(88)	灰白色	粗砂混	良	回転糸切	なし	
2004	杯	126	56	58	暗灰色	粗砂混	良	回転糸切	体部下半ナデ	
2006	杯	138	55	44	暗灰色	良	良	回転糸切	なし	
2027	杯	126	57	87	暗灰色	良	良	回転糸切	なし	

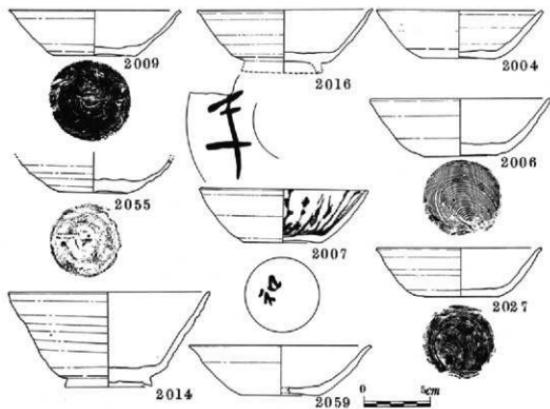


Fig 17 出土須恵器実測図(1)

須恵器(2) (Fig 18, PL12)

遺物番号	器形	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し 技 法	再調整	備考
		口径	底径	器高						
2005	杯	188	55	44	暗灰色	粗砂混	良	回転糸切	なし	底部に墨書き
2028	杯	183	46	59	灰白色	良	良	回転糸切	なし	
2026	高台皿	183	62	28	灰白色	良	良	回転糸切	なし	
2083	蓋	—	—	—	暗灰色	粗砂混	良		つまみ外周を ナデ	
2085	高台壺	—	112	—	灰色	良	良			
2010	蓋	165	—	(34)	灰白色	良	良		つまみ外周～ 肩にケズリ	
2011	高台壺	—	80	—	暗灰色	良	良	ヘラ切	高台内外ナデ	焼成高溫の ため気泡生 ず
2097	甕	204	—	—	灰色	良	良			

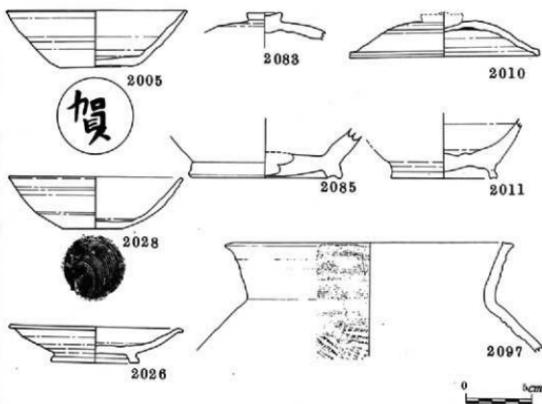


Fig 18 出土須恵器実測図(2)

酸化炎焼成須恵器 (Fig 19, PL 12)

遺物番号	器形	計測値 (%)			色調	胎土	焼成	切り離し 技法	再調整	備考
		口径	底径	器高						
2068	杯	114	51	52	淡赤褐色	良	良	回転糸切	なし	
2053	杯	117	51	50	暗褐色	粗砂混	不可	回転糸切	口縁部ナダ	
2018	杯	124	45	48	淡褐色	石英混	不可	回転糸切	なし	
2064	杯	145	70	44	赤褐色	粗砂混	可	な	し	
2008	杯	122	49	44	暗褐色	良	可	回転糸切	なし	
2074	杯	140	71	34	淡赤褐色	良	良	ヘラ切り	なし	
2082	杯	185	51	44	明灰褐色	粗砂混	不可	回転糸切	体下半ケズリ	口縁内外にスス付着
2081	杯	187	57	40	淡赤褐色	粗砂混	可	回転糸切	なし	部に墨書き

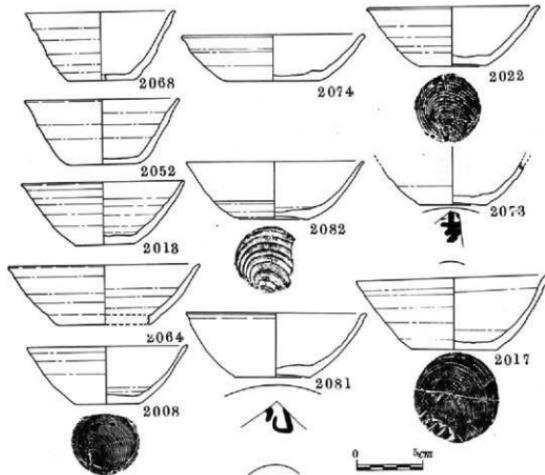


Fig 19 出土酸化炎成須恵器実測図

遺物番号	器形	計測値 (%)			色調	胎土	焼成	切り離し 技法	再調整	備考
		口径	底径	器高						
2022	杯	181	51	45	褐色	粗砂混	可	回転糸切	なし	外面に樹脂接着布
2078	杯	—	51	—	灰赤褐色	粗砂混	可	回転糸切	なし	外面に墨書き
2017	杯	147	65	55	男褐色	粗砂混	不可	回転糸切	なし	

(3) その他の遺物 (Fig 20, PL 12上)

木器・土器の他はこの項にまとめた。次に梗概説明を行なう。

3001~3005は直徑 8 cm内の円角形もしくは円錐台形を呈する手捏ねの土製品であるが、用途その他のについては不明である。一般に焼成は良好である。3003は他に比して扁平であるが、これらは穿孔を有する点で共通する。3004は半ばを失なっているので不明だが、3001, 3002は穿孔を試みている。

3006は酸化炎焼成須恵器の底面を加工した筋鉄車であろう。底部外面にあたる部分に糸切り痕が一部残る。周辺部は打ち欠いたものらしく、わずかにそのあとがうかがえる。

3007は土師器（瓶か？）の把手である。黄褐色を呈し粗砂を多く含むが焼成は良好である。3008はフイゴの羽口である。些少な破片であるが外径約5.8cm 内法約4.0cmの略測定を得た。外表面は高温を受けたため面縮状を呈しており、とくに先端にはカーボンが沈着している。内面は滑らかで赤褐色を呈する。

5001は長さ 6 cm、幅 4.5~5 cm、厚さ 0.7 cm内外の平面台形を呈する鉄片である。2次加工を先にひかえた延べ板とも思われるが、不明である。

5002~5005は古鏡である。順に皇和元宝、韶觀元宝、永樂通宝、寛永通宝と読める。

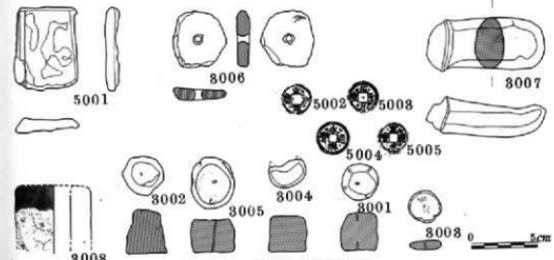


Fig 20 その他の遺物実測図

註1 いわゆる須恵系土器と陶化灰で焼かれた須恵器とは、今回便宜的に陶化灰焼成須恵器として包括した。勿論これは暫定措置であって、資料の累積に伴なって分析、細別していくたい。

(尾形與典 舟山良一)

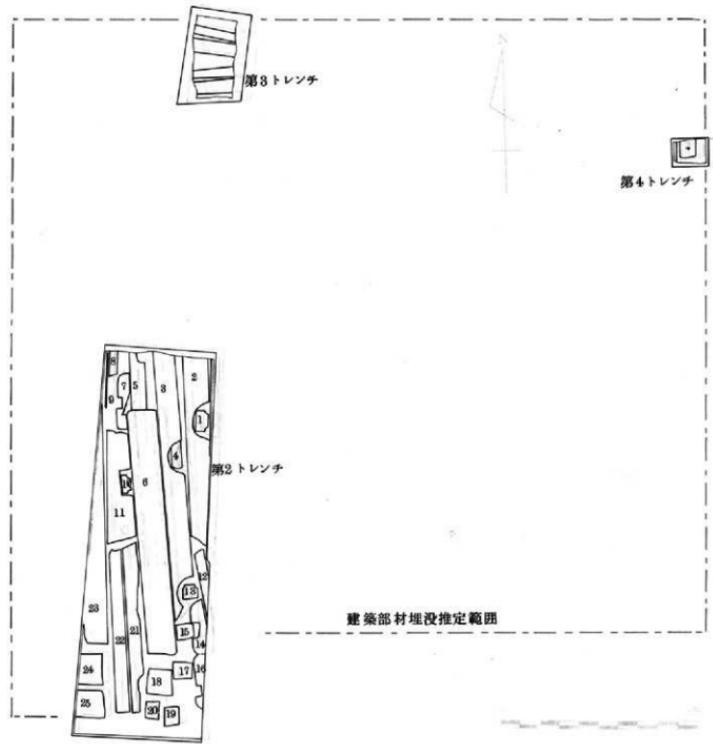
## IV ま と め

以上堂の前遺跡の第1次発掘調査の内容を報告した。最後に報告した諸事実を要約して本書のまとめとしたい。

- 1) 予備調査で発見された建築部材は、SB001 基壇を構築するための筏地葉であることがほぼ明らかになった。ただしSB001 基壇は、それ以前の廃絶した基壇建物を利用して築いた可能性が高く、筏地葉に使用されている建築部材が建物として存在した時期は、SB001 基壇の時期より相当古く考えることができる。
- 2) SB002・4掘立柱造構は、振り方および柱具の様相からみて、かなり大規模な建築物の1部をなすものと考えられる。これにより堂の前遺跡には、今回の発掘区以外にも数棟の同様な建築跡が存在することが予想される。
- 3) SA001 桁列、SD001 潙状造構、SX002 石組造構など、堂の前遺跡には建物跡のほかに種々の遺構が存し、しかもその成立時期にかなりの幅をもつものと思われる。
- 4) 出土遺物については、土器・木製品とも十分な整理ができず、資料の列挙におわってしまった。山形県における須恵器の研究はようやく緒についたばかりであり、今後の資料の増加を待ちたい。また木製品の豊富さは改めて注目されるところであり、系統的整理の必要を感じている。
- 5) 堂の前遺跡の範囲については、今回の調査の主目的であったにもかかわらず、依然として不明な点が多い。東西は180mという今回の調査区よりさらに広がり、南北はⅦA06～68区で北限に関する一資料を得たに留まった。
- 6) より重要なことは、堂の前遺跡を中心とする古代の遺跡群の様相である。城輪柵跡や泉谷地古窯跡群等の関連など重要な問題点は多い。そのためにも堂の前遺跡をはじめ周辺遺跡の早急な保存対策が望まれる。

末尾になるが、今回の調査はあくまで遺跡の範囲確認を主としたため、遺構については存否確認に留めざるを得なかった。加えて多量の湧水のため調査の進行が思うにまかせなかつたことが多い。次年度以降の継続調査においてその欠を補ってゆきたい。

(尾形與典 佐藤庄一)



下層地盤　上層地盤　中間地盤

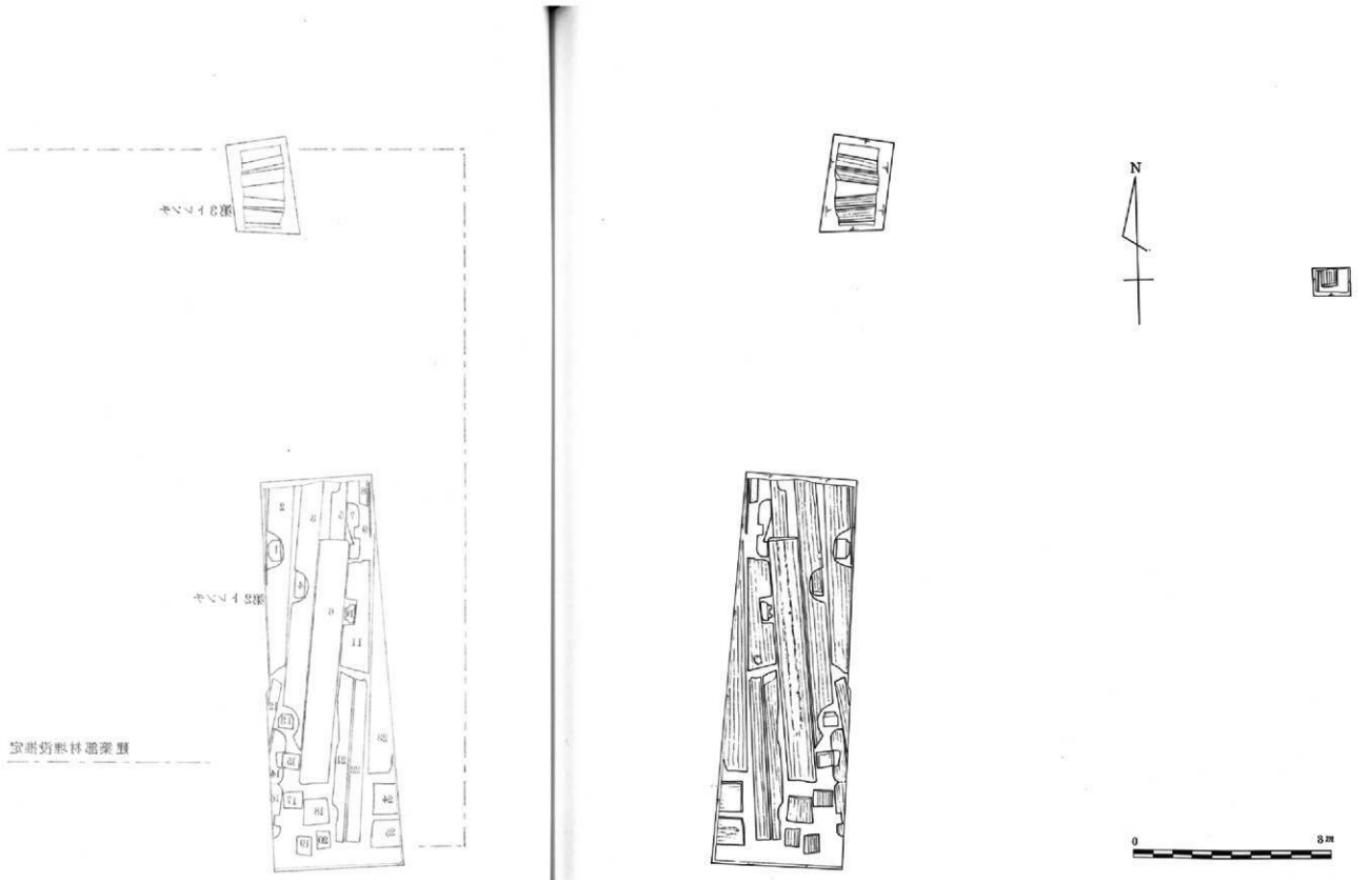


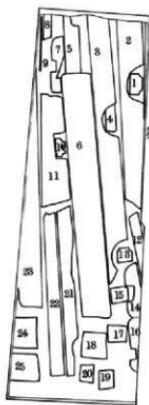
Fig. 21 予備調査トレンチ実測図



第8トレンチ



第4トレンチ



第2トレンチ

建築部材埋没推定範囲

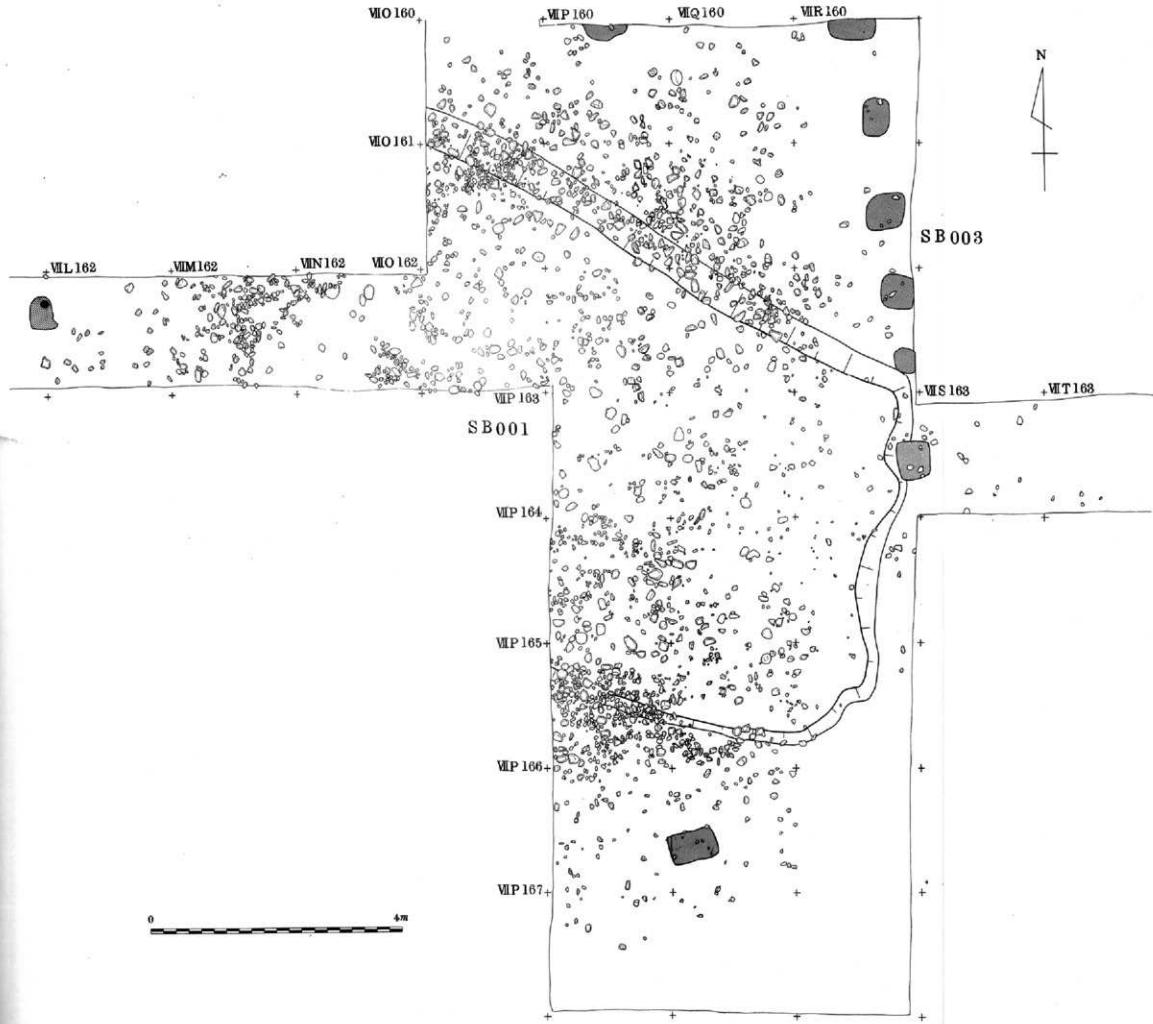


Fig 22 SBOO1基址・SBOO3建物跡実測図

図 版



1 遠 跡 景 観



2 第 1 次 調 査 発 報 状 況



1 予備調査第2トレンチ(部分)



2 予備調査第2トレンチ 脳木出土状況



1 予備調査第3トレンチ

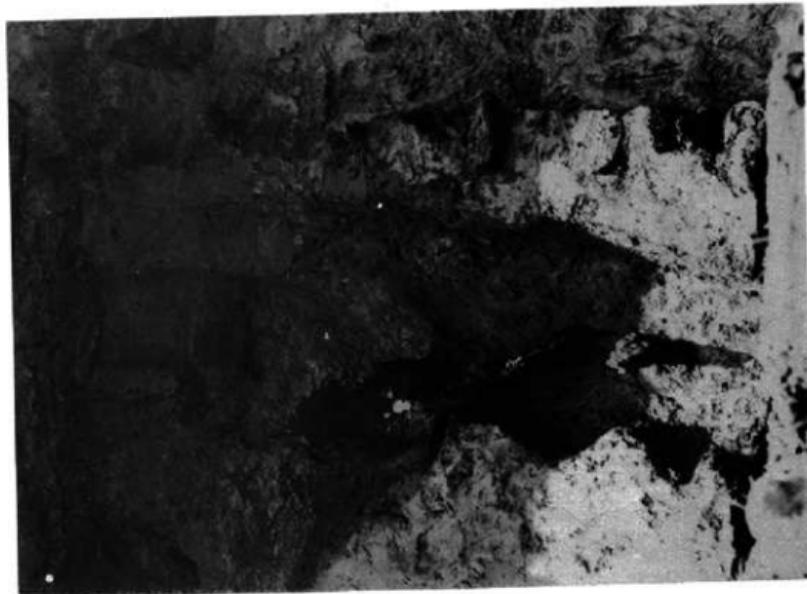


2 予備調査第4トレンチ

PL4



1 SA001系列



2 SA001系列 摄下过状



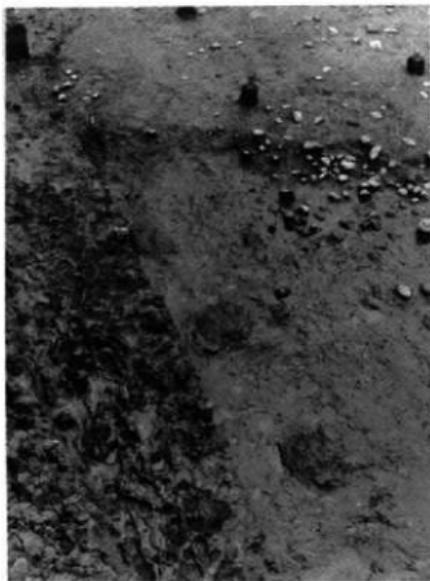
1 S B O O 1 基礎



2 S B O O 1 基礎開拓風景



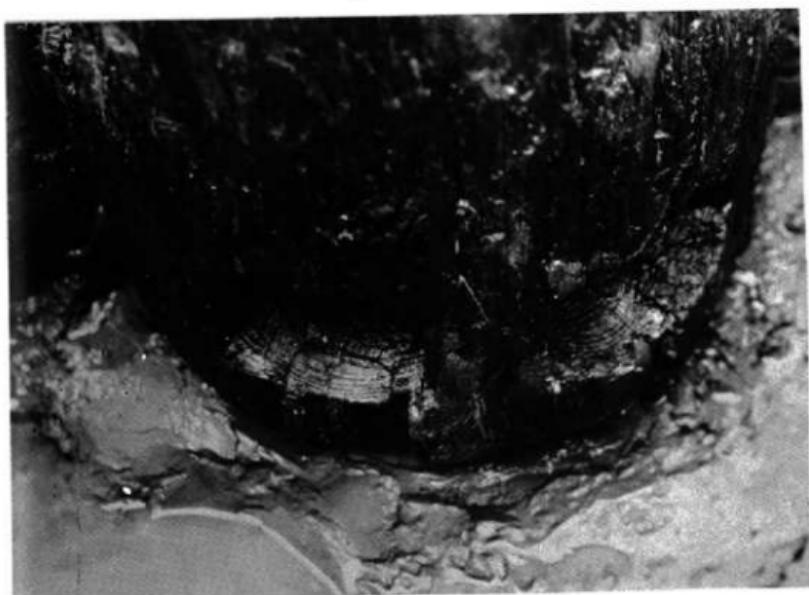
1 SB002 捷立柱遺構



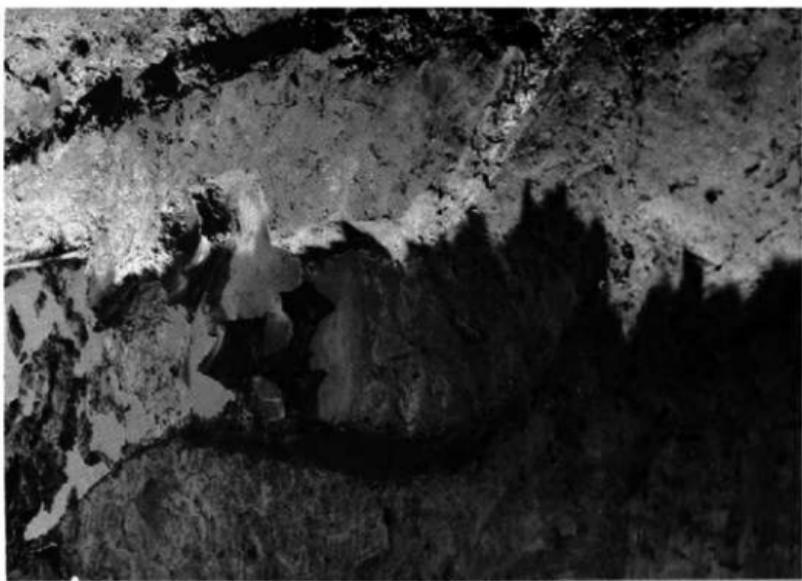
2 SB003 建物跡



1 S B O O 4 振立柱遺構



2 S B O O 4 振立柱遺構柱根部



1 SD001 構状遺構



2 SD001 構状遺構上面の遺物



3 SD001 構状遺構内の遺物



1 SX002石組 遺構



2 MA66～68区

(4)

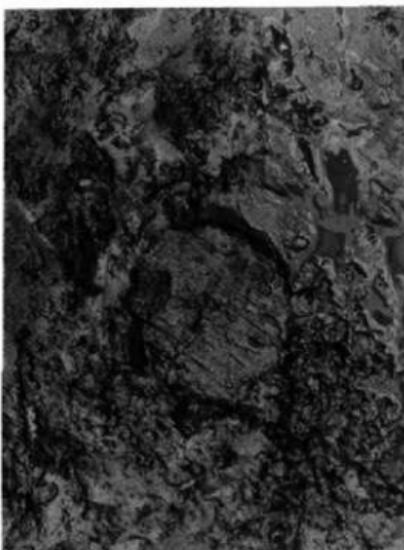
遗物出土状况



(2)

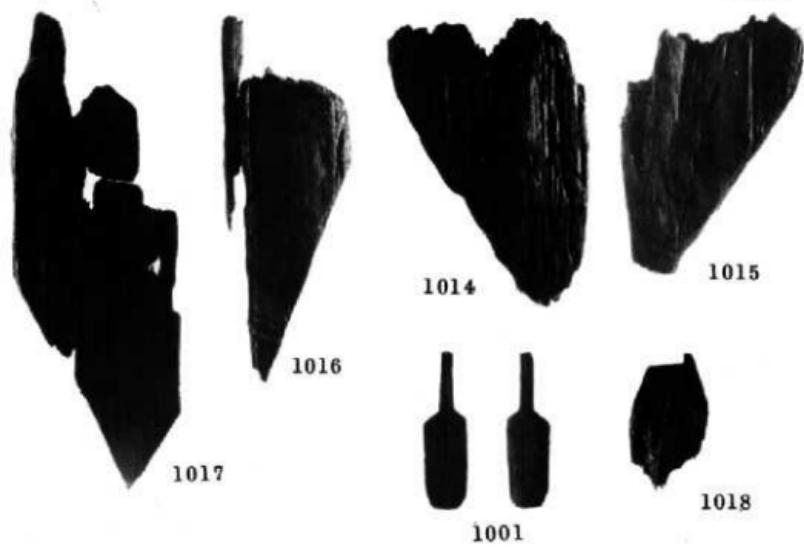


(1)

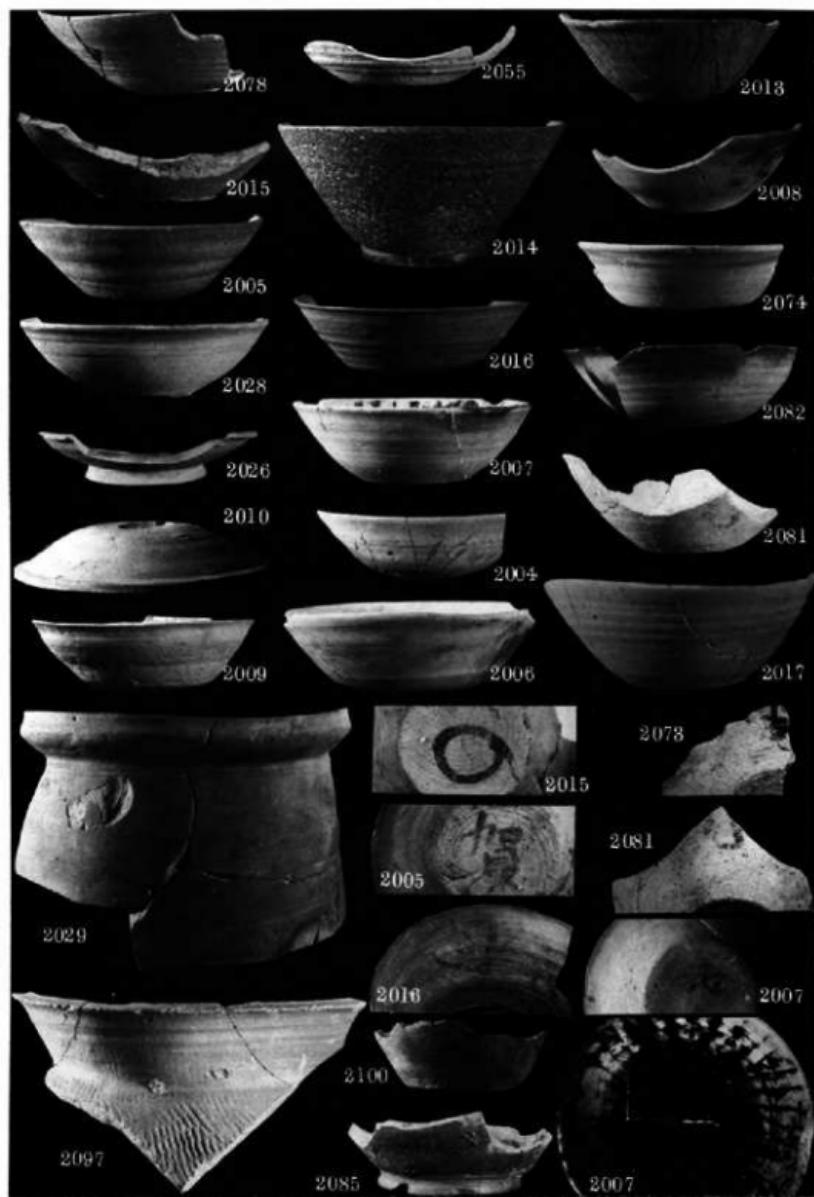


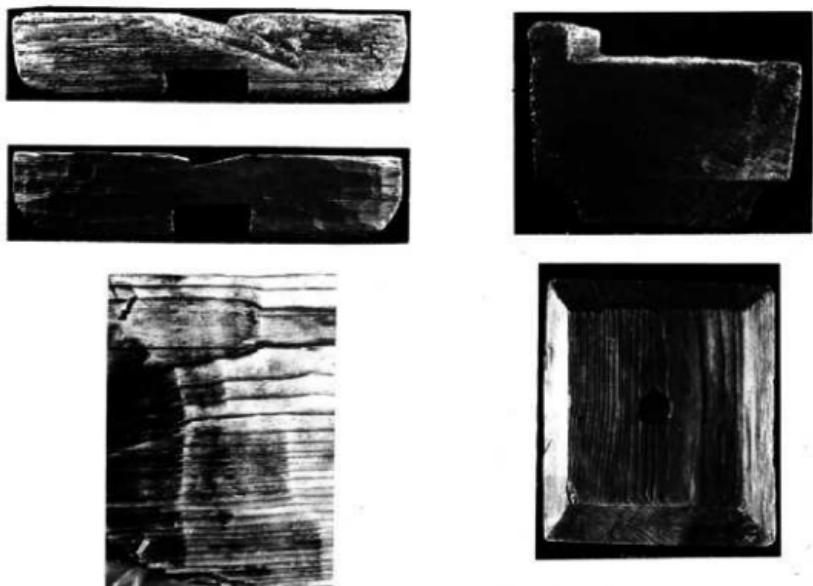
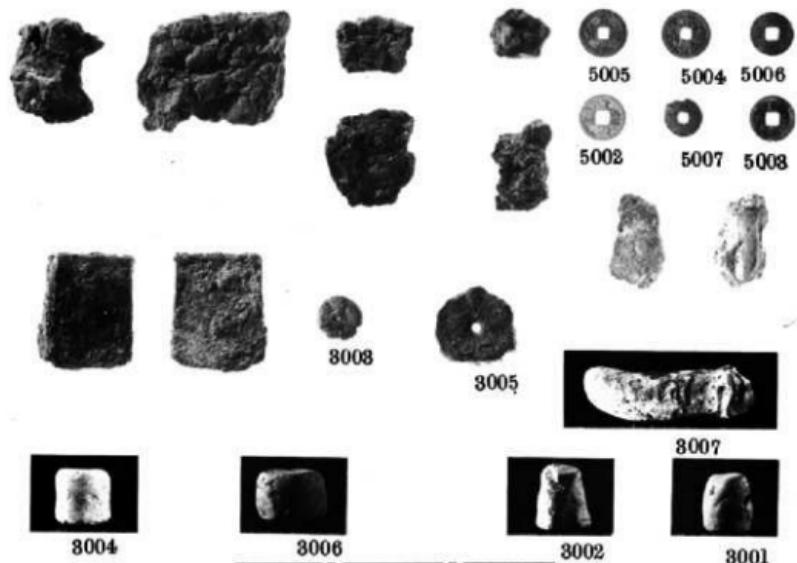
PL 10

P-L 11



木 质 品





上 その他の遺物 下 斗、肘本

---

山形県埋蔵文化財調査報告書第5集

堂の前遺跡

第1次調査報告書

昭和50年3月25日 印刷

昭和50年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

教育庁 文化課

印刷 大風印刷

---